

「哲子の戦争体験」

土屋 哲子さん（昭和7年生まれ）

敦子から娘（葵ちゃん）に伝えたいので書いておいてと言われペンをとりました。

私の戦争体験は昭和十六年（一九四一年）十二月八日ラジオから流れる「本日十二月八日未明我日本国は、アメリカ、イギリスと戦闘状態に入れり」という放送で始まりました。私は小学三年生でした。

一年前神武天皇即位紀元二千六百年の式典があり^{きゅうじょう}宮^{ちようちん}城に提灯行列など家族と見に行きました。お祝いでしたのに国が戦争に向っている様な不穏な空気を子供ながら感じていて「とうとう戦争が始まったんだ」と思いました。

それからの毎日はラジオや新聞で日本軍の勝利を伝える報道を楽しみに聞いていたように思います。

近所の若い男の人には赤紙（令状の用紙が赤色だった）という召集令状が届く様になり、戦地に行くのを町会全体で日の丸の旗を振って見送りました。両親や家族も出征して戦地に行きもう帰って来ないかも知れない我子を名誉なことと、涙も見せず見送りました。

母親達は、銃後^{じゆうご}（戦場の^{うしろ}後で家庭等）を守る為に国防婦人会が結成されました。私の母も白い割烹着^{かっぽうぎ}を着てたすきをかけ敵機が来襲し焼夷弾が落され焼かれた家を消す演習等していました。

各家の前には、防火用水（水を入れる水槽）が置かれていて、そこからバケツで水を汲み皆でリレー式で火元に運び消す訓練ですが、後にわかった事です。次々と焼夷弾が落とされる上、油が入っていたとかでバケツの水で消せる状態ではありませんでした。

家々のガラス戸には、十字やバツテンに紙を貼りました。爆風で、割れるのを防ぐ為です。夜は灯りが外にもれて敵の飛行機から民家のある事がわからないように電灯には黒い布をまいてその下だけ明るくしていました。その為外は夜になると真暗でした。又、各家毎に、防空壕を掘りました。焼夷弾等落とされた時に身を守る為人間が四、五人はいる事の出来る大きさの多いのですが、入り口にもふたをして中に火が入らないようにしていました。

敵機が来襲するのがわかると警戒警報、近くに来ると空襲警報のサイレンが鳴ります。空襲警報になると防空頭巾をかぶり貴重品をもって防空壕に入りました。まだ戦局が厳しくない頃でしたが近くの叔父の家から帰る時に遅くなり外は真暗でよその家の防空壕に姉が落ちてしまった事もありました。顔の打撲で母が一晩中姉の顔を冷やしていて、私も姉のけががどんなにひどいのか心配しながら寝たのを思い出しました。

昭和十八年（一九四五年）には、学徒出陣がきました。これからの日本を担^{にな}って行く人財として大学生は、召集を免除されていたのですが戦地で戦ってくれる若い人が足りなくなったのだと思います。

そして国は更に若い人を空襲で失なわない為に都会の小学生を疎開させることにしました。

その学童疎開には、地方の親戚や知人宅に行くのを縁故疎開と云い学校毎に地方のお寺や旅館等に行くのを集団疎開と云いました。何らかの理由でどちらにも行かない生徒は、今迄の学校に通い残留組と言っておりました。

私は両親の里が富山県にありましたが、日頃あまり行き来していないのにひとりで行くのは淋しいと思い、集団疎開なら学校のお友達と一緒にいいのではないかと集団疎開を選びました。

昭和十九年（一九四四年）八月中半 その日はやって来ました。東京から宮城県の鳴子へと旅立ちました。それは両親姉妹と永遠の別かれになるかも知れませんが私は六年生で更に幼稚だったのでしょう。遠足にでも行く気分になかった気がします。

先に布団と衣類や学用品は行李^{こうり}という竹であんだ衣装箱に名札をつけて鳴子へ送りました。当日は、おべんとう、手作りの小豆^{あづき}の甘納豆他をリュックサックにいっぱい入れてもらい出発しました。

鳴子は温泉地でコケシが有名です。私達を受け入れてくれた旅館は「姥の湯」といい湯治場という農家の人や病氣療養の人達が長期間自炊等して滞在するひなびた旅館でした。町中硫黄のおいがいっぱいでした。お風呂は大きかったです。

先生と寮母さん、生徒は小学三年生から六年生で全員で二百名位？よく覚えていませんが。六畳か八畳の部屋に六、七名地域毎に三年生から六年生一緒です（後に学年別になりましたが）。両方共男女は別でした。疎開の一日は、旅館裏の河原での体操で始まり、朝食、学年別に分かれて勉強、午後は、草取り等作業が多かった気がします。

何といっても食糧が不足している時代でしたのでご飯は、中に大根や、さつまいものまざったものでお茶わんに八分目、おかずは、お魚一切れ、汁物、煮物がある日もあったかも知れません。後に聞きましたが、他の疎開地の食事よりずっと良かったみたいです。殆んどの子供はおなががすいて辛かったようです。私は少食だったのか辛かった思い出はないのですが、勿論おやつ等なくお手玉に入っていた大豆を取り出し火鉢でいて食べたりしました。

疎開先には、順番に家族が面会に来てくれました。疎開していた八ヶ月間に二回でしたがその時は、親が持って来てくれたおはぎ等別室でおなかいっぱい食べられるのです。急に沢山食べるので、お腹をこわす子が多勢いました。

面会は日帰りか一泊でした。母が帰る時は、姿が見えなくなったら涙が止まりませんでした。私は六年生で上級生であり班の班長。泣き顔で自分の部屋に戻るわけにはいきません。宿の廊下をぐるぐると何回廻ったか？涙の止まるのを待ちました。

後年。面会の時母と一緒にだった、お友達のお母さんから私の母が、鳴子から乗り換えの仙台駅まで、ずっと泣いていたのよと聞かされました。今思い出しても涙ぐんでしまいます。あの時が永遠の別れとならず本当によかったです。

鳴子は宮城県、今より雪が多く冬は雪道のかわく事はありませんでした。どこに行くのも急な坂を登り降りしなければならず雪道用の靴などなくすべらない様歩くのが大変でした。すべるといえばお手洗の足元も凍っていてつかまる所もなく、落ちない様に用をたすのが必死でした。今の様な便器ではないので、体ごと落ちるのです。

洗たくは寮母さんがしてくれました。しらみ（寄生虫）等もいるようになり熱湯で消毒などして下さっていました。

持ち物（衣類や学用品・洗面道具他）は行李の身とふたに納められ、部屋の壁側に六人分が並んでいます。

当時から整理が下手だったので、私のところが一番乱れていたようで、寮母さんから「哲子さんは家で何もしてなかったんでしょ。お母さんに甘えて」と言われ、上級生でもありはずかしい思いをしました。

風邪など病気もしましたが、遠い診療所にもつれていってもらいました。夜中、咳をしていると先生がいらっしゃってお風呂に入ってみましょうと、つれていって下さいました。大きなお風呂に夜中、ひとりはいり、先生が待っていらっしゃる。はずかしかった思い出があります。大人になってからありがたかったと思ったわけです。

遠足にも行きました。鳴子は景勝地でもあり鳴子峡にも行き湯けむりの先に見える秋の紅葉は初めて見る美しさでした。今でも思い出せます。

町全体は、コケシを作っているお店が多く、お休みの日にはお友達と見に行っていました。各々お店には特徴はあるのですが、絵柄は、鳴子独得のもので大体同じでした。私もいくつもおみやげに買いました。背丈が三十センチ以上もあるのも買いました。

後に富山県に再疎開した時、二、三才だった妹が、そのコケシを（とても重いのですが）お人形さんとしてひもでおんぶして田んぼに落ちてしまい大さわぎしたことがありました。

買ったコケシは、鳴子から東京、富山、東京と戦時中も大事に、持ち歩いていました。

家族とも別れ質素な食事、寒さなど集団疎開は辛かった筈ですが、最上級の六年生で、みんなの模範にならなければという立場と性格から、面会に来てくれた母が帰った時以外は、悲しいとかさびしいとか思いませんでした。一つには、六年生で翌年の三月には、卒業。東京に帰ることがきまっていたからかも知れません。

そして、その時がやって来ました。

昭和二十年（一九四五年）三月九日 六年生全員と担任の先生は、鳴子を後に東京に向かいました。

全国の集団疎開をしていた六年生は前後して東京他、親元に戻りました。

夜行の貸切列車にのりみんなようやく家に帰れるのですから嬉しかったと思います。夜になりうつらうつらと眠りかけた頃列車は停車。先生から列車の座席の下に避難するように指示がありました。避難訓練は日頃やっていたので防空頭巾をかぶり目と耳を手でおおい座席の下にもぐりました。

鳴子では一度も空襲はなかったので、何がおきているのかわかりませんでした。空襲警報が解除されたのでしょうか、車中に電灯がつき座席の下より出るようにとの事。子供ですよね。避難しながら、眠ってしまった子もいました。

列車の外は真暗。でも遠くの空が真赤に染っていました。止った所は、^{たいら}平駅（福島県）で空襲で燃えているのは、東京方面だとの事でした。

先生から聞かされても空襲で、焼夷弾かおちて焼けた所のある事は知っていましたが、テレビ等ない時代で、私は見たことはありませんでした。ですから不安はありましたが、自分の家が焼けていたらどうしようなどとは、全く思いませんでした。

外がうす明るくなった頃警報が解除されたのでしょうか。列車がのろのろと動き出しま

した。

何時間たったのかわかりませんがすっかり外は明るくなり列車は駅につき降ろされました。

降りた駅は上野ではなく、北千住でした。昨夜からの空襲で列車は上野駅まで行けなかったのです。先生の後について歩きはじめるとあたり一面焼野原でした。何があったのかわかりませんでした。

私達は小石川（現在の文京区）の礫川小学校に帰らなければなりません。引率の先生も当然初めてのことで道順もわからなかったと思います。焼野原で歩いている人もおらず、人を探して道を聞いている様でした。私達は、お友達と話すでもなくただ先生の後について歩きました。途中、小学校で休ませてもらいお水をいただきました。どの位歩いたのか全くわかりませんが民家が見えてきました。焼けてないところに来て少しホットしました。緑の生垣のある民家の細い道でした。

更に歩いて私の礫川小学校は焼けずにありました。母も迎えに来てくれていました。
(後に地図を見ますと北千住→日暮里→谷中→千駄木→向丘→西片町→小石川礫川小学校（さだかではありません）歩きましたようです。)

学校での事はあまり覚えていませんが、八ヶ月ぶりに無事に帰って来ましたが、先生の簡単なお挨拶があっただけで、すぐに母と家に帰りました。

家には、父や姉、妹に久しぶりで会ったのですが、ショックが大きかった為でしょうかその時の記憶がありません。

私の戻って来た日は、五大東京の大空襲といわれる三月九日から十日の大空襲の日だったと後にわかりました。

はじめての東京大空襲で東京下町の殆んど全部二十六万戸が焼かれ、十万人が亡くなったと言われています。

東京全区の小学六年生は私達と前後して帰京したわけで帰って来たら、家も家族も亡くなって孤児となった子供もいたわけです。

私の自宅は小石川区春日町（今の文京区本郷）でこの空襲で、数十メートル先は、焼かれましたがその時は私の家は残っていました。私自身、孤児になった可能性と紙一重だった訳です。

戦時中ながら、家族そろっての生活がはじまり先ずご近所に帰って来たごあいさつに行ったりしました。喜んでくださったと思うのですが、「哲子ちゃん色が白くなったわねえ」と言われたことが一番心に残っています。私も女の子だったのだと後年おかしく

なりました。鳴子の硫黄温泉に八か月毎日入っていたからだと思います。

小さな幸せは長くは続きませんでした。

帰ってから一ヶ月後の四月十三日の夜大きな空襲が又ありました。(五大東京大空襲のひとつです)

家族(父は見はり番)は、はじめ防空壕に入りましたが、敵機が近いから、出て逃げた方がよいとのこと母と姉は妹を背おって、私の四人は、前回の三月十日に焼けてしまった本郷に向って逃げました。私は必死に母達についていきました。

空を見ると真暗な中焼夷弾が次々と落とされ真赤に光ったり飛行機もそのあかりでせんかいしているのが見えました。いつ頭に落ちるかわからない状態で生きたここちがしませんでした。

本郷東大病院の近くの本郷消防署の地下に入りようやくひと息つきました。前回の空襲で焼けてはいますが外壁は残り地下は大丈夫でした。

敵機も去り空襲も解除になったのでしょう。

父は、家に残っていましたが、自宅のことも心配で家に戻りかけました。まだ明けきらずうす暗い中、遠くから父が自転車をひいて来るところでした。父と無事に会うことが出来、うれしかったです。

その時父から「家は焼けたよ」と聞かされても、「ああそう」という位で、悲しかった記憶が全くありません。

あたり一面家の焼跡を見ているのですが父と戻って見たのかどうかもわかりません。

家がなくなり私達は、柳町小学校が焼け残ってましたので避難のためそこへ行きました。そこでは家族毎に、手持ちの缶詰などで食事を作りさけ缶の入ったおじやを作ってもらいおいしかったのを覚えています。学校に一晩いたのか二晩いたのか又切符をどうして手に入れたのかもわかりませんが、私達は、父母の里 富山に行きました。

列車は、貨物列車でした。昔は十二時間は乗っていたはずですが何を食べたか? トイレはどうしたのかこれも全く覚えていません。父母や姉に聞いておけばよかったと本当に残念です。自分で日記等記録することも出来たわけですがそんなこともしていませんでした。

次々と起こることがショッキングなことばかりで、神経というか心が正常に働いていなかった気がします。

富山に着き、先ず母の里に行きました。

福野の駅から十分位の松原^{まつわら}という所で、祖母、叔父(母の長兄)叔母(母の未の妹)

と、東京京橋に住んでいた母の次兄の家族（疎開して来ていた）達に会えました。元々きまっていたと思いますが数泊の後父の里に行きました。やはり福野町ですが八塚^{やつか}という、松原から一里程はなれたところでした。

祖母、叔父（父の兄）叔母、その子供（私のいここにあたる）五人が住んでいました。そこの家の納屋に住む事になりました。

結構広かったのですが畳ではなくむしろが敷いてありきれいではありませんでした。それでも家族だけで食事を作ったり食べたり出来たので、母など本家の姑や義兄への気がねも少く良かったと思います。お米やお野菜他本家からいただいて生活していたと思います。

特に伯母はやさしくいつもにこにこ話かけてくれました。祖母も、自分の部屋からおかき等出してくれました。同年代のいことも仲良くして自分の家の畑からスイカを取って来て二人だけで食べたりいたずらもしました。

私は三月十日に疎開から東京に帰ってから、都立第二高女に入学しました。空襲等で、入学式もないまま家がやけ富山に来てしまいました。数ヶ月後富山の砺波高女から編入出来たとの通知がありました。

登校してみますと、しっかり皆は勉強していて、英語などの文章などもスラスラ読み、他の教科もわからない事が多くどうしようかと思いました。又、朝全校生徒が学校の周辺をかけ足でひと廻りするのですが、はだしです。皆は痛くないのでしょうか？ジャリ道もあり、都会育ちの私は痛くて痛くて閉口しました。

そんな大変な時でも人間走りながらいねむりがでるのです。原因は、むしろの部屋だからでしょうか、夜になるとノミがでてさゝれるので眠れないのです。みんなで起きてノミ退治をする為です。ノミは飛ぶのでなかなかとれませんが、とれてつぶすと真赤な血が出て血の出た時は快感でした。さゝれたところは、赤くはれ又栄養失調からかいせんという皮フ病にもなりました。

勉強は、わからないし走るのは痛いし、小学校で優等生だった私は、がんばる意欲をなくしよく学校を休みました。

その年の五月の末、まだ戦争は終わってないのに父は東京へ行きました。父は農業が出来ない訳でもないのに、東京に戻るための家を探しに行きました

ところが運悪く、五月二十五日の東京大空襲に遭遇してしまいました。自宅が焼けた時よりもっとこわい思いをしたそうです。富山に戻って来た父は、東京はもうだめだと言って東京に帰ることをあきらめ富山で醤油工場に勤める様になりました。

東京では、ラジオや新聞で日本軍の戦果などみていましたが富山では空襲もないので、私の戦争への関心はうすれていた気がします。今もう忘れてただけかも知れませんが。それでも八月六日にそして八月十日に広島と長崎に新型爆弾が落されたことは、大人達から聞いて不安になりました。

そして八月十五日、終戦の日が来ました。敗戦です。直接ラジオは聞きませんでした。親から聞きました。空襲などなくなり電灯もつけられるという喜びはなく、これから日本はどうなるのか女性は連れていかれるなどの話も聞いておそらく暗い気持ちでいっぱいでした。

私の戦争体験は、ここで終わりです。

令和6年8月2日 寄稿